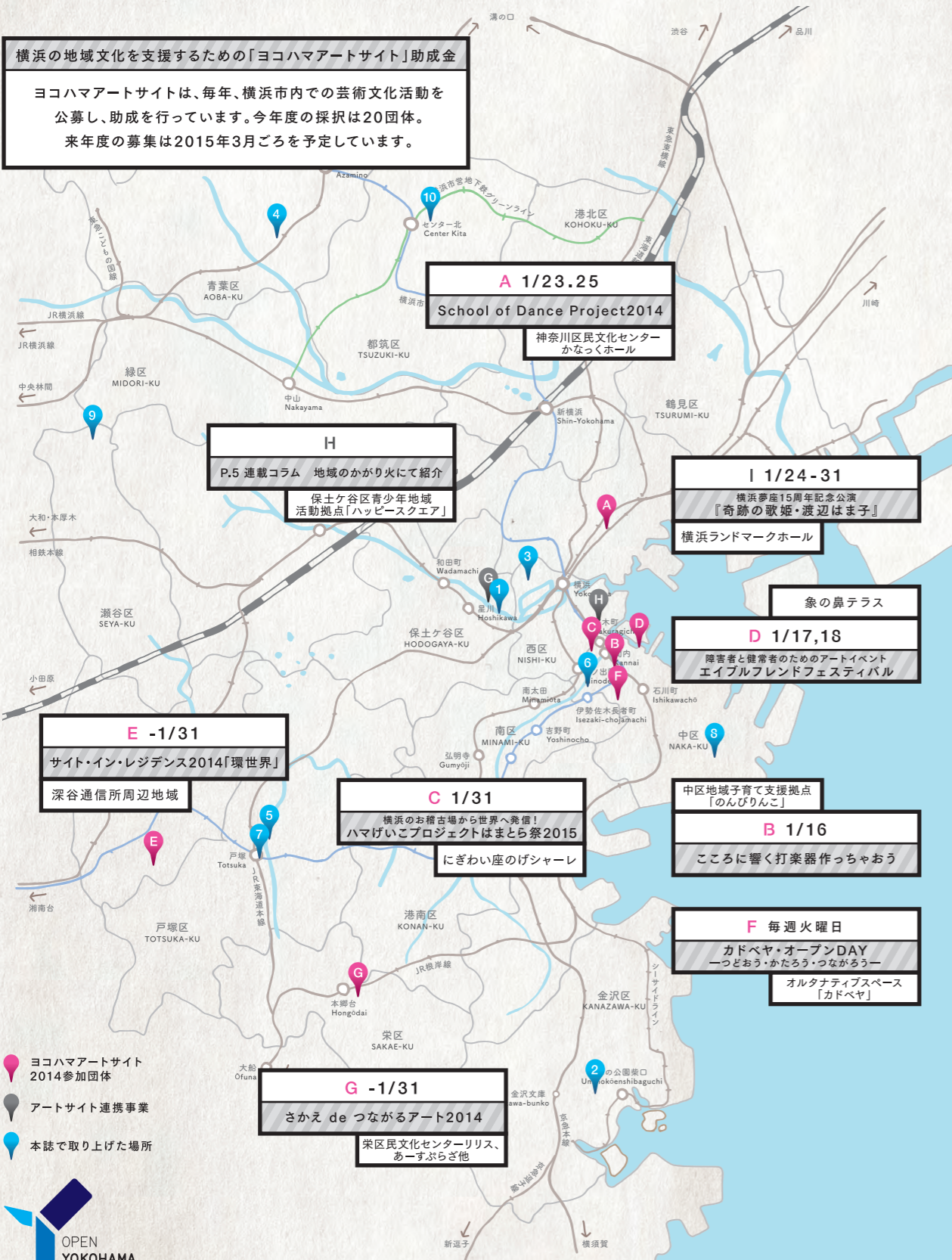


# YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト おでかけMAP

横浜市の地域文化をサポートするヨコハマアートサイト2014参加団体の中から、2015年1月のイベントをピックアップ。ぜひ、おでかけの予定に加えてほしいものばかりです。



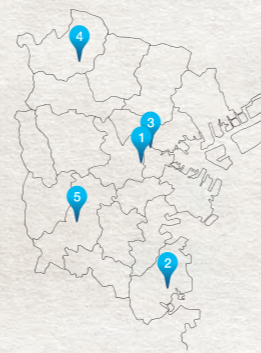
# ヨコハマアートサイト

横浜の地域文化を考える・応援する



Vol. 002

「特集 境内につどう」



信仰の場？  
いえいえ  
それだけじゃないんです

1



### 遊び場だった この場所から 地域の文化が生まれる

駅前から続く旧東海道では骨董市が並び、大勢の人が道端にしゃがみこんで朝から品定めをしている。向こうの店の一角からチャーンと柝の音が響いてくる。常連さんも集まった蕎麦屋の門口では、役者姿の子どもたちが「保土ヶ谷こども歌舞伎」への協力のお礼を伝えている。冬が近づく商店街は、雲ひとつない青空だ。

歌舞伎幕が張られた保土ヶ谷区・たちばな橋樹神社の神楽殿で11月22日に上演されたのは、大名と太郎

冠者がお嫁さん探しに出かける珍道中のお話「釣女」。歌舞伎初挑戦者を含む小学4～6年生の子どもたちは夏休みから稽古を続けてきた。その甲斐あって、達者な演技に客席から笑いと拍手が続く。

今年で二年目となるこのイベントを企画した天王町商店街協同組合の園隆雄さんは「彼らが大人になった時に『天王町っていい町だね』と戻って来てくれたらうれしいですね」と話す。自身もまちの真ん中にある神社が遊び場だった。「いたずらをしては宮司さんに怒られたものです」と笑う。

ヨコハマアートサイトが支援している金沢文庫芸術祭の浅葉弾

さんも子どものころ毎日のようにお寺で遊んでいた。「ザリガニを釣りカエルを捕まえ、果物をもいで…もう庭みたいなものでしたよ」と懐かしむ。その称名寺の参道で、地域文化に対する思いを語り合った人たちが99年に企画したのが「金沢文庫・称名寺芸術祭」だ。

改称した現在でも企画のひとつが寺の境内に位置するアサバ・アートスクエアで続く。区内のイベントをつなぐ「街角アトラリー」のワークショップが行われている横で今日も子どもたちが駆け回っている。「子供の未来は地球の未来」を掲げる芸術祭は早くも来年の計画作りに忙しそうだ。

3

### いまでも残る 精巧な富士塚に見る 庶民の生活

富士山を見晴らせる横浜には、人造の小高い丘・富士塚が各地にある。都筑区の池辺富士や川和富士、神奈川区の熊野堂富士などだ。散歩がてら、西区の浅間神社にある芝生富士に登った。ガイドはアーティストの有坂蓉子さん。彼女が制作したポータブル富士塚『メタル富士』はヨコハマアートサイトが支援し今秋に都筑区で開催された都筑アートプロジェクトの「ニュータウン遺跡ハウス」でも展示された。

富士塚は、富士を信仰する「富士講」の人たちが手軽に登拝できるように作ったもの。「今はスティックなものではなく、山開きや冬至のお参り、正月の初拝みなど日々の生活になじんでいるようです」と有坂さん。

この日は芝生富士の頂上から裏大門へ続く道の入口が工事用フェンスで閉ざされていた。あわてて関係者に聞くと、下山道や登山記念碑は残すとのこと。富士塚は時代にあわせ少しずつ姿を変えながら、地元の人の手で守られている。



4

### 芸能に宿る 地域の風土と 土地の神様

12月に本屋の店頭で並んだ新潮文庫『オオカミの護符』の著者で映画プロデューサーの小倉美恵子さんは、現在の川崎から横浜にかけて広がっていた農村地帯に今もひっそりと残る地域の営みに目を向けてきた。映像作品『うつし世の静寂に』では青葉区・寺家町の田園風景も映し出されている。

「自然と山を拜むということは、人々の思いの発露なのでしょう。住んでいると手を合わせたくくなるようなものが風土の中にはあります。日本列島をかたち作ってきた



言葉にできないもの、でも語るべきものがあると思うんです」と静かに語る小倉さん。たとえば「畔つけ」と呼ばれる畦の側面を補強するお百姓さんの姿。そこに長年かけて培われた身体性や造形美、ある種のアートを見たという。

地域で続くお祭りには、芸能の中に風土や土地の神様の存在が刻まれている。「人と人の繋がりやその土地の風土が積み重なってできた全体の一部、いわば三角形の頂点がお祭りなんです。近代化によって頂点の部分しか見えなくなっているだけです、外からは」。



5

### 阿弥陀様のいる コミュニティカフェ

戸塚区・善了寺の境内にある天然建築材を使ったお堂には、商店街の人や近隣の大学生など老若男女がやって来る。現在改装中の本堂からも阿弥陀様が間借りしている。

この日は、うすあかりの中で毎月恒例の「テラヨガ」が始まった。いちばん痛がって呼吸が荒い参加者は住職さんかもしれない。

「東日本大震災のとき、善了寺にいけば誰かがいるんだと思うと安心しました。スタッフは家族みたいなものです」と話すのはNPO法人カフェ・デラ・テラの大澤久美さんだ。

新しいことを始めたわけではなく住職の成田智信さんは強調する。「戦後すぐの祖父の代は、旅一座の芝居会場として貸したり、映画館やダンスホールのような活動もしていたんです」。人の集いの中心には今もお寺や神社がある。

- P.1 金沢文庫芸術祭「街角アトラリー」会場 アサバ・アートスクエア
- P.2 保土ヶ谷区・橋樹神社「保土ヶ谷こども歌舞伎」
- P.3左 浅間神社・芝生富士
- P.3中 「オオカミの護符」(新潮社)と、ささらプロダクション製作映画DVD「うつし世の静寂に」「オオカミの護符」
- P.3右 善了寺住職・成田智信さんとNPO法人カフェ・デラ・テラ大澤久美さん

ヨコハマ  
アートサイト  
ラウンジ  
Vol.2

## アートでであう 地域の多文化



【会場】nitehi works(横浜市中区若葉町3-47-1)【ゲスト】沼尾実(大佛次郎記念館館長)/蔭山ツル(横浜下町パラダイスマつり実行委員会)【主催】ヨコハマアートサイト事務局

### 日常生活の 中にある 多文化との つながり

アートと地域の関わりについて考え、交流する場。ヨコハマアートサイトラウンジ。第二回は10月15日に開催されました。本誌の創刊記念でもある今回のテーマは「アートでであう地域の多文化」。ゲストは創刊号の特集「となりの多文化」にも登場していただいた沼尾実さんとヨコハマアートサイトが支援をしているアートプロジェクト・横浜下町パラダイスマつり実行委員会の蔭山ツルさんです。会場となったのは中区・若葉町にあるnitehi works。横浜下町パラダイスマつりの拠点「横浜パラダイス会館」と「シネマ・ジャック&ベティ」の向かいにあるオルタナティブスペースです。

大佛次郎記念館の館長である沼尾実さんは、教員時代に鶴見区の中学校で行った文化祭の記録映像をご紹介くださいました。ステージの上で生徒たちが発表する琉球舞踊やチャングの演奏、同級生に通訳してもらいながらのスピーチなど。慣れない日本で生活する中で、自分や両親の持つ文化とどう付き合っていくのか。自分のルーツを見つめる生徒たちの様子を語る沼尾さんの姿が印象的でした。

この事業は、市民やNPO団体等が主体となって地域課題へのさまざまなアプローチを行う文化芸術活動を支援することで、地域におけるつながりやネットワークを広げ、コミュニティの活性化を図る「地域文化サポート事業」です。そのために、一年を通じて、参加者間の研修や交流に取り組んでいきます。平成26年度より、STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団で事務局を担当しています。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局  
〒220-0004 横浜市西区北幸  
1-11-15 横浜STビル 208  
(NPO法人STスポット横浜  
地域連携事業部 内)  
TEL:045-325-0410  
FAX:045-325-0414  
WEB: <http://y-artsite.org>  
MAIL: [office@y-artsite.org](mailto:office@y-artsite.org)

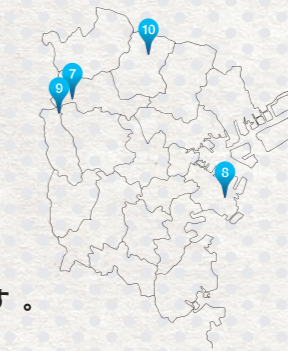
 @Y\_Artsite

 ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト Vol.002

発行 ヨコハマアートサイト事務局  
編集 NPO法人STスポット横浜  
テキスト 小川智紀 池田友実  
鬼木和浩  
デザイン 相澤事務所  
撮影 福井裕子  
印刷・製本 合資会社 三島印刷所  
協力 有坂蓉子  
NPO法人カフェ・テラ・テラ  
ささらプロダクション  
天王町商店街協同組合  
※五十音順、敬称略  
発行日 2014年12月26日



事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、  
今日も、横浜市内の  
あっちこっちへうろうろしています。

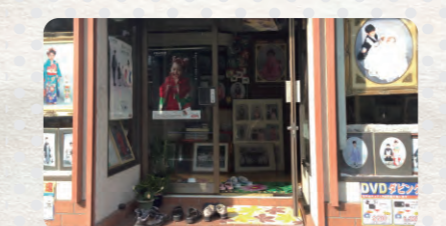
7 9月17日(水)  
戸塚・さくらプラザにて親子向けイベント「とことこフェスタ」。手作りおもちゃや輪投げ、妊婦体験など様々なブースが並び、メインステージでは、打楽器コンサートグループ・あしあとによる楽器づくりワークショップとコンサート。自作のカスタネットを持った子どもたちが、思い思いに音楽を楽しんでいた。



9 10月26日(日)  
長く米軍施設がおかれていた上瀬谷通信施設のはらっぱにて、瀬谷区最大のイベントである瀬谷フェスティバル。幼いころに何度か訪れたことがあるはずだが、記憶の何倍も賑わっていて驚いた。ナチョスとラムネを手に、人波の中を進む。瀬谷クイズやキッズコーナー、健康相談コーナーなども賑わっている。



8 10月12日(日)  
バスに乗って中区・本牧地区センターへ。本牧アートプロジェクト『演劇クエスト・本牧ブルース編』のプレワークショップ。ミッションを与えられ、まちを歩く。大きな道路を背にして進む。とんがり屋根の中学校。昔ながらの写真館。バスで通り過ぎるだけだったまちのことが、少しずつ気になってくる。



10 11月2日(日)  
今日は台風で流れてしまった都筑民家園のイベント順延日のため、センター北へ。「大おにぎり展」開催中の横浜市歴史博物館を抜けていくと、たき火の匂い。見ると土器でご飯を炊いている。立ち上る煙を横目に野外ライブがスタート。晴れてよかった。江戸時代の民家ではいけばな展やカフェ、弓矢体験など。



もしもし、そちらの様子はどうですか？

地域に暮らす人々の  
物語によりそうこと

渋谷駅から東急田園都市線で二駅の三軒茶屋には、世田谷パブリックシアターという劇場があります。世田谷区の劇場として、地域の人々が演劇やダンスを「観る」だけでなく、「体験」したり「活用」するプログラムを、たくさん実施しています。

たとえば、世田谷のこえアーカイブプロジェクト『世田谷で暮らす―移り住むこと、移り住むひと』。人々の暮らしや記憶を「世田谷のこえ」として集め、保存していくとするプロジェクトです。「移り住むこと」には、どこかに移り住むにせよ、移り住まないにせよ、人が、人生のあるタイミングで、どう生きていきたいかに向き合い選択し、深く関わっています。そこには、家族や仕事、学校、恋人との出会いや別れなど、さまざまな物語が見え隠れします。

「私が海が好きと言ってたら、彼が海ではたらく仕事について石垣に行くことになって、まあ、ついていかないとダメかなって」。参加者の一人の言葉です。  
地域に暮らす人々の数だけある一つ一つ特別な物語―そうした物語にじっとよりそうことも、劇場のできる一つのつだと思っっています。あなたが、いまそこに住んでいるのは、なぜですか？ 話してみたくなったら、劇場に是非いらしてくださいね。

世田谷パブリックシアター 学芸  
恵志美奈子(えし・みなこ)

世田谷パブリックシアター



ハッピースクエア(保土ヶ谷区)

地域文化のかがり火

第2回 誰でも入れる街の空き地  
ハッピースクエア(保土ヶ谷区)

近所のガキ大将が毎日現れる空き地があったのは昭和の頃の話。最近の都市空間には目的を持たない場所はほとんど存在しない。でも街が人にやさしくなるためには、誰でもふらりと安心して立ち寄れる、目的のない空き地みたいな場所が必要なのではないだろうか。天王町商店街の一角で、NPO法人リロードが開設している青少年の地域活動拠点「ハッピースクエア」は、まるで街の空き地だ。地域の誰もが、いつ来ても、いつ帰ってもいい。毎日お昼ごろには、小さいお子さんが走り回って大きな歓声をあげ、まるで公園のようだ。夕方になると、女子中高生が、恋愛や学校のグチを話して、マスターが待つカウンターにやってくる。みかけは大人のパーミタ。小中学生が運営に参加する季節ごとのイベントもあるので、少しずつ顔見知りが増えていく。この場所の内装は、6年前に子どもたちとアーティストが協力してつくりあげたもの。淡い色の壁と遊び心のあるイラストが、くつろいだ雰囲気づくりに一役かっている。

アートが柔らかく包み込むこの空間に集う人同士が、ガキ大将ほどではないけれど、お互いにちょっとずつ気に掛けている。そんな関係が街の居心地の良さをつくっているのは、昭和の頃から変わらない。